

鳥の北斗七星

つめたいいぢの悪 [わる] い雲 [くも] が、地 [ぢ] べたにすれすれに垂 [た] れましたので、野 [の] はらは雪 [ゆき] のあかりだか、日 [ひ] のあかりだか判 [わか] らないやうになりました。

鳥 [からす] の義勇艦隊 [ぎゆうかんたい] は、その雲 [くも] に圧 [お] しつけられて、しかたなくちよつとの間 [あひだ]、亜鉛 [とたん] の板 [いた] をひろげたやうな雪 [ゆき] の田圃 [たんぼ] のうへに横 [よこ] にならんで仮泊 [かはく] といふことをやりました。

どの艦 [ふね] もすこしも動 [うご] きません。

まつ黒 [くろ] くなめらかな鳥 [からす] の大尉 [たいゐ]、若 [わか] い艦隊長 [かんたいちやう] もしやんと立 [た] つたまゝうごきません。

からすの大監督 [だいかんとく] はなほさらうごきもゆらぎもいたしません。からすの大監督 [だいかんとく] は、もうずゐぶんの年老 [としよ] りです。眼 [め] が灰 [はい]

いろになつてしまつてゐますし、啼 [な] くとまるで悪 [わる] い人形 [にんぎやう] のやうにギイギイ云 [い] ひます。

それですから、鳥 [かぎす] の年齢 [とし] を見分 [みわ] ける法 [はふ] を知 [し] らない一人 [ひとり] の子供 [こども] が、いつか斯 [か] う云 [い] つたのでした。

「おい、この町 [まち] には咽喝 [のど] のこわれた鳥 [からす] が二 | 疋 [ひき] あるんだよ。おい。これはたしかに間違 [まちが] ひで、一 | 疋 [びき] しか居 [をり] ませんでしたし、それも決 [けつ] してのどが壊 [こわ] れたのではなく、あんまり永 [なが] い間 [あひだ]、空 [そら] で号令 [がうれい] したために、すつかり声 [こゑ] が錆 [ざ] びたのです。それですから鳥 [から] すの義勇艦隊 [ぎゆうかんたい] は、その声 [こゑ] をあらゆる音 [と] の中 [なか] で一等 [いつとう] だと思 [おも] つてゐました

雪 [ゆき] のうへに、仮泊 [かはく] といふことをやつてゐる鳥 [からす] の艦隊 [かんたい] は、石 [いし] ころのやうです。胡麻 [ごま] つぶのやうです。また望遠鏡 [ぼうえんきやう] でよくみると、大 [おほ] きなのや小 [ちい] さなのがあつて馬鈴薯 [ばれいしょ] のやうです。

しかしだんだん夕方 [ゆふがた] になりました。

雲 [くも] がやつと少 [すこ] し上 [うへ] の方 [ほう] にのぼりましたので、とにかく鳥 [からす] の飛 [と] ぶくらゐのすき間 [ま] ができました。

そこで大監督 [だいかんとく] が息 [いき] を切 [き] らして号令 [かうれい] を掛 [か] けます。

「演習 [えんしふ] はじめいおいつ、出発 [しゅつぱつ]」

艦隊長鳥 [かнтаいちやうからす] の大尉 [たいゐ] が、まつさきにぱつと雪 [ゆき] を叩 [たゝ] きつけて飛 [と] びあがりました。鳥 [からす] の大尉 [たいゐ] の部下 [ぶか] が十八 | 隻 [せき]、順々 [じゆんじゆん] に飛 [と] びあがって大尉 [たいゐ] に続 [つゞ] いてきちんと間隔 [かかく] をとつて進 [すす] みました。

それから戦闘艦隊 [せんたうかнтаい] が三十二 | 隻 [せき]、次々 [つぎつぎ] に出発 [しゅつぱつ] し、その次 [つぎ] に大監督 [だいかんとく] の大艦長 [だいかんちやう] が巖 [おごそか] に舞 [ま] ひあがりました。

そのときはもうまつ先 [さき] の鳥 [からす] の大尉 [たいゐ] は、四 [し] へんほど空 [そら] で螺旋 [うづ] を巻 [ま] いてしまつて雲 [くも] の鼻 [はな] つ端 [ぱし] まで行 [い] つて、そこからこんどはまつ直 [す] ぐに向 [むか] ふの杜 [もり] に進 [すす]

ゝ] むところでした。

二十九 | 隻 [せき] の巡洋艦 [じゆんやうかん]、二十五 | 隻 [せき] の砲艦 [ほうかん] が、だんだんだんだん飛 [と] びあがりました。おしまひの二 | 隻 [せき] は、いつしよに出発 [しゆつぱつ] しました。こゝらがどうも烏 [からす] の軍隊 [ぐんたい] の不規律 [ふきりつ] なところですよ。

烏 [からす] の大尉 [たいゐ] は、杜 [もり] のすぐ近 [ちか] くまで行 [い] つて、左 [ひだり] に曲 [ま] がりました。

そのとき烏 [からす] の大監督 [だいかんとく] が、「大砲撃 [たいほう] てつ。」と号令 [がうれい] しました。

艦隊 [かんたい] は一斉 [いつせい] に、があがあがあがあ、大砲 [たいほう] をうちました。

大砲 [たいほう] をうつとき、片脚 [かかあし] をぶんとうしろへ挙 [あ] げる艦 [ふね] は、この前 [まへ] のニダナトラの戦役 [せんえき] での負傷兵 [ふしやうへい] で、音 [おと] がまだ脚 [あし] の神経 [しんけい] にひびくのです。

さて、空 [そら] を大 [おほ] きく四 [し] へん廻 [まは] ったとき、大監督 [だいか

んとく] が、

「分 [わか] れつ、解散 [かいさん]」と云 [い] ひながら、列 [れつ] をはなれて杉 [すぎ] の木 [き] の大監督官舎 [だいかんとくくわんしや] におりました。みんな列 [れつ] をほごしてじぶんの営舎 [えいしや] に帰 [かへ] りました。

烏 [からす] の大尉 [たいゐ] は、けれども、すぐに自分 [じぶん] の営舎 [えいしや] に帰 [かへ] らないで、ひとり、西 [にし] のほうのさいかちの木 [き] に行 [い] きました。

雲 [くも] はうす黒 [くろ] く、たゞ西 [にし] の山 [やま] のうへだけ濁 [にご] った水色 [みづいろ] の天 [てん] の淵 [ふち] がのぞいて底光 [そこびか] りしてゐます。そこで烏仲間 [からすなかま] でマシリイと呼 [よ] ぶ銀 [ぎん] の一つ星 [ぼし] がひらめきはじめました。

烏 [からす] の大尉 [たいゐ] は、矢 [や] のやうにさいかちの枝 [えだ] に下 [お] りました。その枝 [えだ] に、さつきからじつと停 [とま] つて、ものを案 [あん] じてゐる烏 [からす] があります。それはいちばん声 [こゑ] のいゝ砲艦 [ほうかん] で、烏 [からす] の大尉 [たいゐ] の許嫁 [いひなづけ] でした。

「があがあ、遅 [をそ] くなつて失敬 [しつけい]。今日 [けふ] の演習 [えんしふ] で疲 [つか] れないかい。」

「かあお、ずるぶんお待 [ま] ちしたわ。いつかうつかれなくてよ。」

「さうか。それは結構 [けつこう] だ。しかしおれはこんどしばらくおまへと別 [わか] れなければなるまいよ。」

「あら、どうして、まあ大 [たい] へんだわ。」

「戦闘艦隊長 [せんたうかんたいちやう] のはなしでは、おれはあした山鳥 [やまがらす] を追 [お] ひに行 [ゆ] くのさうだ。」

「まあ、山鳥 [やまがらす] は強 [つよ] いのでせう。」

「うん、眼玉 [めだま] が出 [で] しゃばつて、嘴 [くちばし] が細 [ほそ] くて、ちよつと見掛 [みか] けは偉 [ゑら] さうだよ。しかし訳 [わけ] ないよ。」

「ほんたう。」

「大丈夫 [だいじやうぶ] さ。しかしもちろん戦争 [せんさう] のことだから、どういふ張合 [はりあひ] でどんなことがあるかもわからない。そのときはおまへはね、おれとの約束 [やくそく] はすつかり消 [き] えたんだから、外 [ほか] へ嫁 [い] つてくれ。」

「あら、どうしませう。まあ、大 [たい] へんだわ。あんまりひどいわ、あんまりひどいわ。それではあたし、あんまりひどいわ、かあお、かあお、かあお、かあお」

「泣 [な] くな、みつともない。そら、たれか来 [き] た。」

烏 [からす] の大尉 [たいゐ] の部下 [ぶか]、烏 [からす] の兵曹長 [へいさうちやう] が急 [いそ] いでやつてきて、首 [くび] をちよつと横 [よこ] にかしげて礼 [れい] をして云 [い] ひました。

「がぁ、艦長殿 [かんちやうどの]、点呼 [てんこ] の時間 [じか] でございます。一同整列 [いちどうせいれつ] して居 [を] ります。」

「よろしい。本艦 [ほんかん] は即刻帰隊 [そくこくきたい] する。おまへは先 [さき] に帰 [かへ] つてよろしい。」

「承知 [しやうち] いたしました。」兵曹長 [へいさうちやう] は飛 [と] んで行 [い] きます。

「さあ、泣 [な] くな。あした、も一度列 [いちどれつ] の中 [なか] で会 [あ] へるだらう。

丈夫 [じやうぶ] であるんだぞ、おい、お前 [まへ] ももう点呼 [てんこ] だらう、すぐ

帰 [かへ] らなくてはいかん。手 [て] を出 [だ] せ。」

二 | 足 [ひき] はしつかり手 [て] を握 [にぎ] りました。大尉 [たいゐ] はそれから枝 [えだ] をけつて、急 [いそ] いでじぶんの隊 [たい] に帰 [かへ] りました。娘 [むすめ] の鳥 [からす] は、もう枝 [えだ] に凍 [こほ] り着 [つ] いたやうに、じつとして動 [うご] きません。

夜 [よる] になりました。

それから夜中 [よなか] になりました。

雲 [くも] がすつかり消 [き] えて、新 [あた] らしく灼 [や] かれた鋼 [はがね] の空 [そら] につめたいつめたい光 [ひかり] がみなぎり、小 [ちい] さな星 [ほし] がいくつか聯合 [れんがふ] して爆発 [ばくはつ] をやり、水車 [するしや] の心棒 [しんばん] がキイキイ云 [い] ひます。

たうたう薄 [うす] い鋼 [はがね] の空 [そら] に、ピチリと裂罅 [ひゞ] がはいつて、まつ二 [ふた] つに開 [ひら] き、その裂 [さ] け目 [め] から、あやしい長 [なが] い腕 [うで] がたくさんぶら下 [さが] がつて、鳥 [からす] を握 [つか] んで空 [そら] の天井 [てんじやう] の向 [むか] ふ側 [がは] へ持 [もつ] て行 [い] かうとします。鳥

「[からす] の義勇艦隊 [ぎゆうかんたい] はもう総掛 [そうがゝ] りです。みんな急 [いそ] いで黒 [くろ] い股引 [もゝひき] をはいて一生 [いつしやう] けん命 [めい] 宙 [ちゆう] をかけめぐります。兄貴 [あにき] の烏 [からす] も弟 [おとうと] をかばふ暇 [ひま] がなく、恋人同志 [こひびとどうし] もたびたびひどくぶつつかり合 [あ] ひます。

いや、ちがひました。

さうぢやありません。

月 [つき] が出 [で] たのです。青 [あを] いひしげた二十日 [はつか] の月 [つき] が、東 [ひがし] の山 [やま] から泣 [な] いて登 [のぼ] つてきたのです。そこで烏 [からす] の軍隊 [ぐんたい] はもうすつかり安心 [あんしん] してしまひました。

たちまち杜 [もり] はしづかになつて、たゞおびへて脚 [あし] をふみはづした若 [わか] い水兵 [すゐへい] が、びつくりして眼 [め] をさまして、があと一発 [いつぱつ]、ねぼけ声 [ごゑ] の大砲 [たいはう] を撃 [う] つだけでした。

ところが烏 [からす] の大尉 [たいゐ] は、眼 [め] が冴 [さ] えて眠 [ねむ] れませんでした。

「おれはあした戦死 [せんし] するのだ。」大尉 [たいゐ] は呟 [つぶ] やきながら、許

嫁 [いひなづけ] のゐる杜 [もり] の方 [ほう] にあたまを曲 [ま] げました。

その昆布 [こんぶ] のやうな黒 [くろ] いなめらかな梢 [こづゑ] の中 [なか] では、あの若 [かわ] い声 [こゑ] のいゝ砲艦 [ほうかん] が、次 [つぎ] から次 [つぎ] といういろいろな夢 [ゆめ] を見 [み] てゐるのでした。

鳥 [からす] の大尉 [たいゐ] とたゞ二人 [ふたり]、ばたばた羽 [はね] をならし、たびたび顔 [かほ] を見合 [みあは] せながら、青黒 [あをぐろ] い夜 [よる] の空 [そら] を、どこまでもどこまでものぼつて行 [い] きました。もうマヂエル様 [さま] と呼 [よ] ぶ鳥 [からす] の北斗七星 [ほくとしちせい] が、大 [おほ] きく近 [ちか] くなつて、その一 [ひと] つの星 [ほし] のなかに生 [は] えてゐる青 [あを] じろい苹果 [りんご] の木 [き] さへ、ありありと見 [み] えるころ、どうしたわけか二人 [ふたり] とも、急 [きふ] にはねが石 [いし] のやうにこわばつて、まつさかさまに落 [お] ちかゝりました。マヂエル様 [さま] と叫 [さけ] びながら愕 [おど] ろいて眼 [め] をさましますと、ほんたうにからだか枝 [えだ] から落 [お] ちかゝつてゐます。急 [いそ] いではねをひろげ姿勢 [しせい] を直 [なほ] し、大尉 [たいゐ] の居 [ゐ] る方 [ほう] を見 [み] ましたが、またいつかうとうとしますと、こんどは山鳥 [やまがらす] が鼻眼鏡

〔はなめがね〕などをかけてふたりの前〔まへ〕にやつて来〔き〕て、大尉〔たいゐ〕に握手〔あくしゆ〕しようとします。大尉〔たいゐ〕が、いかんいかん、と云〔い〕つて手〔て〕をふりますと、山鳥〔やまがらす〕はピカピカする拳銃〔ピトル〕を出〔だ〕していきなりずどんと大尉〔たいゐ〕を射殺〔いころ〕し、大尉〔たいゐ〕はなめらかな黒〔くろい〕胸〔むね〕を張〔は〕つて倒〔たふ〕れかゝります、マヂエル様〔さま〕と叫〔さけ〕びながらまた愕〔おどろ〕いて眼〔め〕をさますといふあんばいでした。

鳥〔からす〕の大尉〔たいゐ〕はこちらで、その姿勢〔しせい〕を直〔なほ〕すはねの音〔おと〕から、そらのマヂエルを祈〔いの〕る声〔こゑ〕まですつかり聴〔き〕いて居〔を〕りました。

じぶんもまたためいきをついて、そのうつくしい七〔なな〕つのマヂエルの星〔ほし〕を仰〔あふ〕ぎながら、あゝ、あしたの戦〔たゝかひ〕でわたくしが勝〔かつ〕ことがいゝのか、山鳥〔やまがらす〕がかつのがいゝのかそれはわたくしにわかりません、たゞあなたのお考〔かんが〕へのとほりです、わたくしはわたくしにきまつたやうに力〔ちから〕いつぱいたゝかひます、みんなみんなあなたのお考〔かんが〕へのとほりですとしづかに祈〔いの〕つて居〔を〕りました。そして東〔ひがし〕のそらには早〔はや〕くも少〔す

こ] しの銀 [ぎん] の光 [ひかり] が湧 [わ] いたのです。

ふと遠 [とほ] い冷 [つめた] い北 [きた] の方 [ほう] で、なにか鍵 [かぎ] でも触 [ふ] れあつたやうなかすかな声 [こゑ] がしました。鳥 [からす] の大尉 [たいゐ] は夜間双眼鏡 [ナイトグラス] を手早 [てばや] く取 [と] っつて、きつとそつちを見 [み] ました。星 [ほし] あかりのこちらのぼんやり白 [しろ] い峠 [とふげ] の上 [うへ] に、一 | 本 [ほん] の栗 [くり] の木 [き] が見 [み] えました。その梢 [こずゑ] にとまつて空 [そら] を見 [み] あげてゐるものは、たしかに敵 [てき] の山鳥 [やまがらす] です。大尉 [たいゐ] の胸 [むね] は勇 [いさ] ましく躍 [おど] りました。

「があ、非常召集 [ひじやうせうしふ]、があ、非常召集 [ひじやうせうしふ]」

大尉 [たいゐ] の部下 [ぶか] はたちまち枝 [えだ] をけたてゝ飛 [と] びあがり大尉 [たいゐ] のまはりをかけめぐります。

「突貫 [とつくわん]。」鳥 [からす] の大尉 [たいゐ] は先登 [せんたう] になつてまつしぐらに北 [きた] へ進 [すす] みました。

もう東 [ひがし] の空 [そら] はあたらしく研 [と] いた鋼 [はがね] のやうな白光 [しろびかり] です。

山鳥 [やまがらす] はあわてゝ枝 [えだ] をけ立 [た] てました。そして大 [おほ] きくはねをひろげて北 [きた] の方 [ほう] へ遁 [に] げ出 [だ] さうとしましたが、もうそのときは駆逐艦 [くちくかん] たちはまはりをすつかり囲 [かこ] んでゐました。

「があ、があ、があ、があ、があ」大砲 [たいほう] の音 [おと] は耳 [みゝ] もつんぼになりさうです。山鳥 [やまがらす] は仕方 [しかた] なく足 [あし] をぐらぐらしながら上 [うへ] の方 [ほう] へ飛 [と] びあがりました。大尉 [たいゐ] はたちまちそれに追 [お] ひ付 [つ] いて、そのまつくろな頭 [あたま] に鋭 [するど] く一突 [ひとつ] き食 [く] らはせました。山鳥 [やまがらす] はよろよろつとなつて地面 [ぢめん] に落 [お] ちかゝりました。そこを兵曹長 [へいさうちやう] が横 [よこ] からもう一突 [ひとつ] きやりました。山鳥 [やまがらす] は灰 [はい] いろのまぶたをとち、あけ方 [がた] の峠 [とうげ] の雪 [ゆき] の上 [うへ] につめたく横 [よこた] はりました。

「があ、兵曹長。[へいさうちやう] その死骸 [しがい] を営舎 [えいしや] までもつて帰 [かへ] るやうに。があ。引 [ひ] き揚 [あ] げつ。」

「かしこまりました。」強 [つよ] い兵曹長 [へいさうちやう] はその死骸 [しがい] を提 [さ] げ、鳥 [からす] の大尉 [たいゐ] はじぶんの杜 [もり] の方 [ほう] に飛 [と]

びはじめ十八 | 隻 [せき] はしたがひました。

杜 [もり] に帰 [かへ] つて鳥 [からす] の駆逐艦 [くちくかん] は、みなほうほう白 [いろ] い息 [いき] をはきました。

「けがは無 [な] いか。誰 [たれ] かけがしたものは無 [な] いか。」鳥 [からす] の大尉 [たいゐ] はみんなをいたはつてあるきました。

夜 [よ] がすつかり明 [あ] けました。

桃 [もゝ] の果汁 [しる] のやうな陽 [ひ] の光 [ひかり] は、まづ山 [やま] の雪 [ゆき] にいつぱいに注 [そゝ] ぎ、それからだんだん下 [した] に流 [なが] れて、つひにはそこらいちめん、雪 [ゆき] のなかに白百合 [しろゆり] の花 [はな] を咲 [さ] かせました。

ぎらぎらの太陽 [たいやう] が、かなしいくらゐひかつて、東 [ひがし] の雪 [ゆき] の丘 [おか] の上 [うへ] に懸 [かゝ] りました

「観兵式 [くわんぺいしき]、用意 [ようい] つ、集 [あつま] れい。」大監督 [だいかんとく] が叫 [さけ] びました。

「観兵式 [くわんぺいしき]、用意 [ようい] つ、集 [あつま] れい。」各艦隊長 [かく

かんたいちやう] が叫 [さけ] びました。

みんなすつかり雪 [ゆき] のたんぼにならびました。

烏 [からす] の大尉 [たいゐ] は列 [れつ] からはなれて、ぴかぴかする雪 [ゆき] の上 [うへ] を、足 [あし] をすくすく延 [の] ばしてまつすぐに走 [はし] っつて大監督 [だいかんとく] の前 [まへ] に行 [い] きました。

「報告 [ほうこく]、けふあけがた、セビラの峠 [とうげ] の上 [うへ] に敵艦 [てきかん] の淀泊 [ていはく] を認 [みと] めましたので、本艦隊 [ほんかんたい] は直 [たゞ] ちに出動 [しゅつどう]、撃沈 [げきちん] いたしました。わが軍死者 [ぐんししや] なし。報告終 [ほうこくをは] りつ。」

駆逐艦隊 [くちくかんたい] はもうあんまりうれしくて、熱 [あつ] い涙 [なみだ] をぼろぼろ雪 [ゆき] の上 [うへ] にこぼしました。

烏 [からす] の大監督 [だいかんとく] も、灰 [はい] いろの眼 [め] から涙 [なみだ] をながして云 [い] ひました。

「ギイギイ、ご苦労 [くろう] だつた。ご苦労 [くろう] だつた。よくやつた。もうおまへは少佐 [せうさ] になつてもいゝだらう。おまへの部下 [ぶか] の叙勲 [しよくん] は

おまへにまかせる。」

鳥 [からす] の新 [あた] らしい少佐 [せうさ] は、お腹 [なか] が空 [す] いて山 [やま] から出 [で] て来 [き] て、十九 | 隻 [せき] に囲 [かこ] まれて殺 [ころ] された、あの山鳥 [やまがらす] を思 [おも] ひ出 [だ] して、あたらしい泪 [なみだ] をこぼしました。

「ありがたうございます。就 [つい] ては敵 [てき] の死骸 [しがい] を葬 [ほうむ] りたいとおもひますが、お許 [ゆる] し下 [くだ] さいませうか。」

「よろしい。厚 [あつ] く葬 [ほうむ] つてやれ。」

鳥 [から] すの新 [あた] らしい少佐 [せうさ] は礼 [れい] をして大監督 [だいかんとく] の前 [まへ] をさがり、列 [れつ] に戻 [もど] っつて、いまマヂエルの星 [ほし] の居 [み] るあたりの青 [あを] ぞらを仰 [あふ] ぎました。(あゝ、マヂエル様 [さま]、どうか憎 [にく] むことのできない敵 [てき] を殺 [ころ] さないでいゝやうに早 [はや] くこの世界 [せかい] がなりますやうに、そのためならば、わたくしのからだなどは、何 [なん] べん引 [ひ] き裂 [さ] かれてもかまひません。) マヂエルの星 [ほし] が、ちやうど来 [き] てゐるあたりの青 [あを] ぞらから、青 [あを] いひかりがうらうらと湧

[わ] きました。

美 [うつくし] くまつ黒 [くろ] な砲艦 [ほうかん] の鳥 [からす] は、そのあひだ中 [ぢう]、みんなといつしよに、不動 [ふどう] の姿勢 [しせい] をとつて列 [なら] びながら、始終 [しじう] きらきらきらきら涙 [なみだ] をこぼしました。砲艦長 [ほうかんちやう] はそれを見 [み] ないふりしてゐました。あしたから、また許嫁 [いひなづけ] といつしよに、演習 [えんしふ] ができるのです。あんまりうれしいので、たびたび嘴 [くちばし] を大 [おほ] きくあけて、まつ赤 [か] に日光 [につくわう] に透 [す] かせましたが、それも砲艦長 [ほうかんちやう] は横 [よこ] を向 [む] いて見逃 [みの] がしてゐました。

■このファイルについて

標題：烏の北斗七星

著者：宮澤賢治

本文：「注文の多い料理店」

発行：大正十三年十二月一日

販売元：杜陵出版部／東京光原社

新選 名著復刻全集 近代文学館 昭和51年4月1日 発行
(第14刷)

表記：原文の表記を尊重しつつ、以下のように扱います。

○誤字・脱字等は訂正せず、底本通りとしました。

○本文のかなづかいは、底本通りとしました。

○旧字体は、現行の新字体に替えました。ただし、新字体に替えなかった漢字もあります。

新字体がない場合は、旧字体をそのまま用いました。

○繰り返し記号／＼は用いず、同語反復としました。

入力：今井安貴夫

ファイル作成：里実工房

公開：2005年10月3日